

発刊の辞

京都大学国際交流センター・センター長

森 真理子

国際交流センターの日常的な活動は、留学生教育とそれを取り巻く多様な国際交流業務にある。これらの仕事の内容の一つ一つは目に見える形で外に表れることが少ない。その意味で、国際交流センターの仕事の成果をはっきりと数字で割り切るとは難しいともいえる。これは短期間で成果の見えにくい教育全般についていえる事柄かもしれないが、実際は、国際交流センターの教員たちは日々研鑽を怠ることなく、留学生教育と国際交流活動に懸命に取り組んできた。

2010年4月、国際交流センターでは、定員の補充とG30などの資金援助により、教員数が飛躍的に増え、それまで8名で運営してきたセンターの仕事を、多くの新しいスタッフが協力して分担できる体制が組めることとなった。スタッフの増員は活動の幅を広げる意味で大変喜ばしいことである。

この変化に伴って、国際交流センターが構想として温めながら、人員不足から実現することのできなかつた大きな事業に着手することが可能になった。留学生の日本語教育では遠隔キャンパス間を結ぶ日本語講座の開設、日本人学生の送り出しでは国際交流プログラムを発展させ短期留学プログラムを立ち上げた。その他種々の事業が新規に動き始めたが、本研究誌「論攷」の創刊もその一つである。「論攷」は、センター教員の教育・研究活動を集積する雑誌として大きな意味を持つものといえる。

これまで国際交流センターは研究雑誌を持たず、教員は教育や国際交流活動に関する学術的蓄積を外部の発表機関や雑誌投稿によって行ってきた。教育・研究活動においても外部との連携が重要であることはもちろんであるが、センターの構成員が自分たちの活動を自分たちで検証し、次の段階で何が求められるかを常に確認できる媒体を共有することの意味はさらに大きいといえる。これを礎として、学内及び学外さらには海外の教育・研究機関との連携もますます深められることとなろう。研究誌「論攷」はその任務を背負っている。

将来、この研究誌が国際交流センターの活動の原動力となり、新しい留学生教育の在り方や国際交流活動の方向を指し示す出発点となることを心から期待したい。そして、多くの人々を巻き込んで議論が醸され、活力に満ちた国際交流が展開することを願ってやまない。

2011年2月